

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

22

VOL.22 彼女の家

部屋、部屋・・・何か忘れてるなあ、絶対に何か書き忘れている感じがする・・・

と思っていたらやっと思いだした。そう、由実さんの実家だ。

それも、たぶん彼女と付き合いだして割合すぐに行ったあの八王子の実家。

当時、彼女のレコーディングで田町のスタジオに行き、終わると遠い遠い八王子まで送った。

まあ、付き合うということはそういうことだ。で、家に寄らないか、と言われたのだったと思う。

僕は臆病者だ。当然のように両親とか、兄弟とかと会うことになるだろう。

そう考えるとちょっと憂鬱な気持ちになりながら、でも、それも運命みたいな気持ちになりながら彼女の後についてクルマを降りた。不思議な家だった。

一見、なんてことのない3階建てのペンシルビルのようなのだが、

よく見ると細い建物が2つ、不自然にくっついているように見えた。

後で聞いたところによると、向かって右側の方は後に建て増したもので、

誰のアイディアだか、中で繋がるようにしたらしい。

だから新館の方に行く時は変なのよ、と彼女が言った。

確かにものすごく不自然なところに階段があり、

いったん外に出るような感じで新館に繋がっていた。

でも、とりあえず、僕は旧館の1階の

アップライトピアノのある部屋に通された。

大きさは8畳ほどで、なんてことのない普通の部屋。

昔はここを応接間として使っていたけれど、

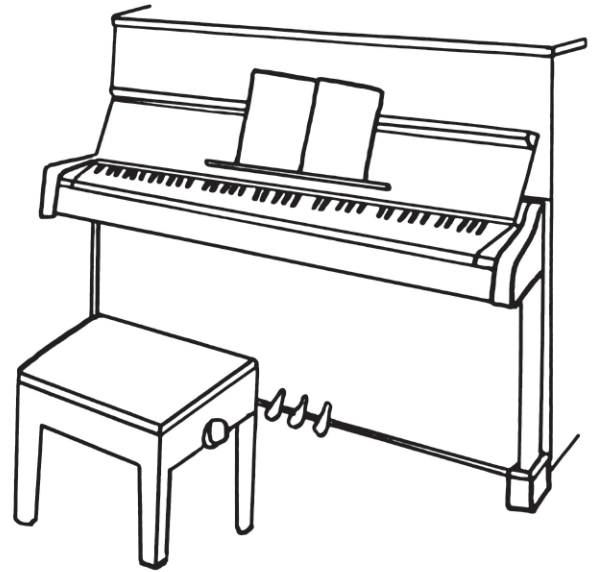
今は作曲部屋として使っている、と言う。なるほどね。

女子の部屋という感じは全くなかった。

夜だったせいもあるけれど、窓は小さく、隣の家はすぐそこに迫っていて、天井は高いのに妙に暗かった。



高校の頃、家を抜け出しては夜遊びに出かけていた
というのがなんとなく分かった。
あまり長い時間いたい感じの部屋ではなかった。
ひととおり雰囲気が分かったあたりで、
バタバタと階段を降りる音がして、急にドアが開いた。
「あら！」とびっくりした顔の女性。お姉さんらしい。
「あら！」はこっちの台詞だ。
これが初めての家族との顔合わせだったと思う。
彼女は由実さんに命令口調で何かを言ったかと思うと、
バタバタと階段を上がっていき、
割合すぐにお母さんが現われた。
緊張した・・・のだろうか。



はっきりとは覚えていないが、僕が想像した由実さんのお母さんとは真逆のイメージだった。
なぜだか彼女の歌からはシャイな洋風の女性を想像していたからだと思う。
何を言われたのか覚えていないが、たぶん、あんたたち付き合ってるの？みたいなことを言われたんだろう。
何と返しているのか分からずに、ただおたおたしていたことは覚えている。
すべてあの部屋から始まったんだなあ、と今は思う。
ちょっと古びたあまりお洒落ではない柄のカーペットと、調律の狂ったピアノ。
それに少しだけかび臭い匂い。たぶん、僕はその日はすぐに失礼したと思うが、
その後、何度も訪ねることになり、この家の全貌は次第に明らかになっていくのだが、
続きはまた今度ということで・・・。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy